

## 論説 大規模介入と完全撤退の狭間：ケネディのベトナム政策をめぐって

著者	松岡 完
雑誌名	筑波法政
巻	39
ページ	75-122
発行年	2005-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00156071">http://hdl.handle.net/2241/00156071</a>

## 大規模介入と完全撤退の狭間

—— ケネディのベトナム政策をめぐって ——

松 岡 完

はじめに

ケネディ外交が残した負の遺産

ベトナム戦争は「頭文字が大文字のWで書かれない」戦争と呼ばれる<sup>(1)</sup>。それは「宣戦布告なき戦争」であり、いつ始まったかも定かではないからである。だが、アメリカとベトナムとの出会いは事実上、一九五〇年にトルーマン(Harry S. Truman)大統領がフランスに対して軍事援助を開始し、軍事援助顧問団(M A A G)を設立したことに始まる。それ以来ほぼ四半世紀に及ぶアメリカの介入は、一定の速度で進んでいったわけではない。たとえばベトナム戦争遂行の主役となった一人マクナマラ(Robert S. McNamara)国防長官、ケネディ(John F. Kennedy)〈ジョンソン(Lyndon B. Johnson) 政権で国防および国務次官補をつとめたバンディ(William P. Bundy)〉、ケネディ政権で省庁横断のベトナム対策作業班を率いたカッテンバーグ(Paul M. Kattenburg)ら政権参画者たちは、いずれもベトナム

表 ケネディ政権参画者によるベトナム戦争史の重要事件

大統領	バンディ（1967年）		カッテンバーグ（1980年）		マクナマラ（1995年）	
ルト ローズ ヴェ	1945年	①仏のインドシナ 復帰を妨害				
トル ーマン	1946年	②仏のインドシナ 復帰を傍観				
	1950年	③仏の戦争支援を 開始				
アイゼン ハワー	1954年	④ジュネーブ会 議／軍事介入 を検討				
	1954～ 55年	⑤東南アジア条約 機構を設立				
	1955～ 56年	⑥ゴ・ジン・ジェ ム政権の擁立				
ケネ ディ	1961年 春	⑦南ベトナム防衛 にコミット	1961～ 62年	①ジュネーブ協定 を無視し軍事 顧問を増派	1961年 1月	①アイゼンハワー ＝ケネディ会 談
	1961年 秋	⑧人的・物的関与 の大幅拡大			1961年末	②米軍事顧問増派 を決定
					1963年 10月	③軍事顧問の撤退 を発表
	1963年	⑨ジェム政権打倒 クーデター	1963年	②ジェム政権打倒 クーデターを 支持	1963年 11月	④ジェム政権打倒 クーデター

ジョンソン					1963年末 ～64年	⑤南ベトナムの政治崩壊への対処
					1964年 8月	⑥トンキン湾事件と議会決議
	1965年	⑩本格的介入の開始	1965年 2月	③大規模北爆を開始	1965年 1月	⑦バンディ＝マクナマラ覚書から北爆へ
			1965年 4～5月	④北ベトナムの4項目和平提案を拒否		
			1965年	⑤戦闘部隊派遣を決定	1965年 7月	⑧戦闘部隊派遣を決定
					1965年末 ～67年	⑨戦争終結のための和平工作
					1966年 春	⑩20万人の増派を決定
					1967年	⑪米軍増強をめぐる激しい論争
			1968年	⑥「名誉ある撤退」の模索開始		
ニクソン			1969年	⑦「ベトナム化」政策の開始		
			1970年	⑧カンボジア侵攻		
			1973年	⑨パリ協定調印		
フォード			1975年	⑩南ベトナム放棄を決定		

戦争史には一〇回前後の重大な分水嶺があったと指摘している（表を参照）。

介入の深化という点からとりわけ重視すべきなのが、一九六一―六三年のケネディ政権期である。ケネディ大統領はベトコン（民族解放戦線 NLF）の脅威に直面した南ベトナム（ベトナム共和国）を防衛すべく、ジュネーブ協定（一九五四年）に違反してまで米軍事顧問を増派した。最後にはそれまで九年以上もアメリカが支えてきた南ベトナムのゴ・ジン・ジエム（Ngo Dinh Diem）政権打倒のクーデターを黙認し、アメリカによる介入の度合いを大幅に拡大させた。

ケネディの補佐官をつとめた歴史学者シュレジンガー（Arthur M. Schlesinger Jr.）によれば、ベトナムは「すべてのうちで最も手に負えない」問題だった。ヒルズマン（Roger Hilsman）極東担当国務次官補は、「ケネディ政権内で最大の分裂を引き起こした問題」でもあったと回顧する。そして米国内の人種差別問題と並んで「ケネディの希望の最大のものを打ち砕いた」問題でもあったと、マサチューセッツ工科大学からホワイトハウスのスタッフとなり、ついで国務省政策企画部長となったロストウ（Walt W. Rostow）はこうい<sup>(17)</sup>。

二年一〇ヶ月という任期の短さも背景となつて、歴史家や政治学者のケネディ評価は、歴代大統領の中位どまり、せいぜい平均のやや上、といったところである<sup>(18)</sup>。しかし米国民にとって、暗殺直後からケネディは彼らの英雄、アメリカの偶像、永遠の理想的な指導者となった。だから一九六一年四月の無謀なキューバ侵攻作戦（ピッグズ湾事件）と並ぶ大失策であり、ケネディ最大の負の遺産となったベトナム介入についても、「ケネディが生きていたら」と夢想する者はあとを絶たない。それは、アメリカが実際に大規模な戦争を経験したのが、彼の後を継いだジョンソンのもどったからである。また、ケネディの死が、希望と輝きに満ちたアメリカと、苦痛と絶望に彩られたアメリカとの分岐点のように思われてならないからである。

## 「生きていたら」論の根拠

とくに外交面でケネディの礼賛者たちは、一九六二年秋のキューバ・ミサイル危機をへて彼が大統領として大きく成長し、自信にあふれた指導者としてソ連のフルシチョフ (Nikita S. Khrushchev) 首相との間で平和共存路線を推し進め、現実には部分的核実験停止条約調印、米ソ直通回線 (ホットライン) 設置などの成果を上げたことを重視する。彼らのうち少なからぬ者は、一九六三年一月二二日、テキサス州ダラスでケネディの命を奪った銃弾はそうした流れを結果として断ち切ったとする。それだけではない。むしろ暗殺は、冷戦の緩和とアメリカのベトナムからの撤退を恐れる「軍産複合体 (Military-Industrial Complex)」に中央情報局 (CIA)、連邦捜査局 (FBI)、マフィア、亡命キューバ人、石油資本などが絡んだ陰謀にはかならない。<sup>7)</sup>

逆に、ケネディが持つ「冷戦の戦士」的側面を重視し、ベトナム介入拡大政策を批判する立場から、彼が生きていても結果は同じであり、むしろジョンソン以上にエスカレーションにのめり込んだ可能性が大きいとする者も少なくない。<sup>8)</sup> この論争は歴史上の「もしも」という、そもそも解答不能の問題を対象としており、いまだに決着がついていない。だがそれは、ベトナム戦争史の鍵の一つを明らかにし、ケネディ外交の本質を示すうえで、避けて通れない問題でもある。<sup>9)</sup>

こうした観点に立てば、一九六〇―六三年のケネディのベトナム政策の実際、とりわけその破綻が明らかになった一九六三年における彼の認識や行動などをつぶさに見る必要がある。とくにその際問題となるのは、ケネディへの積極的評価が、おもに三つの根拠にもとづいていることである。すなわち、第一にケネディはアイゼンハワー (Dwight D. Eisenhower) 前大統領から引き継いだ介入を拡大したけれども、当時の情勢としては最大限コミットメントを抑制

しようとし、またそれに成功していたということ。第二に、一九六三年の時点でベトナム政策の失敗を悟ったケネディが、大統領選挙で再選を果たした後、一九六五年までにベトナムから手を引く決意を固めていたこと。第三に、その証明として、実際に一九六三年末、ケネディが政権内外の反対論を押し切って、段階的撤退の第一歩として米軍事顧問千人の引き揚げに踏み切ったことである。本稿はこの三点を中心に、ケネディのベトナム戦争への対応を探り、そこにどのような特徴、ないし問題点があったのかを検討する。

## 一 戦争遂行の主役

### 「彼らの戦争」に固執

一九六三年九月二日、テレビ・インタビューに臨んだケネディ大統領は、ベトナムでの戦いを「彼らの戦争」と呼んだ。これがしばしば、アメリカのベトナム介入をあくまで支援者の立場に限定し、いずれこの地から手を引きたいというケネディの明確な意図の表れとして言及されるものである。ラスク (Dean Rusk) 國務長官やマクナマラ国防長官も、「戦争を遂行しているのはベトナム人」「これは南ベトナム人の戦争」と強調していた。それはマクナマラが付け加えたように「勝つか負けるかは彼らが何をするかしだい」であり「最終的な結末に対する責任は彼らにある」という外向けの、いわば逃げの発言でもあった。だが、南ベトナムにおける政治的安定の達成と並んで、「彼らがみずから守れないのであれば戦争に勝利をおさめることはできない」という発想が、ケネディ政権のベトナム政策決定の基礎にあったとマクナマラは回顧する<sup>10</sup>。

ヒルズマン極東担当國務次官補によればケネディは、もしベトナムで米地上軍が戦う羽目に陥るとすればそれは「悲

劇的な誤り」であり、それじたい「政治的には自己敗北」を意味すると確信していた。しかも当時、まだその必要も十分感じられていなかった。ベトナムで農民とゲリラを切り離す「戦略村 (Strategic Hamlet)」計画などを担当していたフィリップス (Rufus C. Phillips) が一九六三年秋に述べたように、「ベトナム人には戦う意欲も、戦う能力もある。もし彼らに戦う価値のある政府を与えるのを助けてやれさえすれば、米軍をどれほど送るより値打ちがある」とされたからだった。<sup>11</sup>

ノルディング (Frederick E. Nolting, Jr.) 駐サイゴン大使は、「ベトナム人がみずからの国を平定し、ベトコンを鎮圧し、彼らに対して勝利をおさめられない限り……外国からの派遣軍に同じことができるはずがない」というケネディ政権の共通認識に南ベトナムのジエム大統領も完全に同意しており、その結果「行動の責任は明確にベトナム政府の手に委ねられた」という。一九六三年九月末、サイゴンを訪れたマクナマラ国防長官はジエムに「これは基本的にベトナム人の戦争であり、アメリカができるのは助力を与えることだけである」と力説した。八月に新大使となったロツジ (Henry Cabot Lodge, Jr.) は、一月にクーデターでジエム政権が倒された後も「アメリカ人がここにいるのはベトナムがみずからの足で立つのを助けるためであり、その後は帰国する」と述べた。<sup>12</sup> ラスク國務長官によれば、それは一九四〇年代後半に「ギリシャで共産ゲリラと戦うのに役立った」と同じやり方だった。ジエムをアメリカの傀儡とみなし、アメリカの「新植民地戦争」を非難する共産陣営に対抗する意味もあった。<sup>13</sup>

一九六三年秋、サイゴンで広報を担当するメクリン (John Mecklin) の目には、戦闘部隊の投入こそが「状況を救い、アメリカの威信を保つ唯一の希望」に見えた。だがジョンソン (U. Alexis Johnson) 國務次官代理の回顧によれば、米本土から「たった九〇マイル沖合のキューバをどうしようもないという事実」に敏感だったケネディは、はるかに遠い東南アジアへの派兵に消極的だった。大統領は「戦争をアメリカ化したくなかったし、当時は相対的に低水



準だった北ベトナム（ベトナム民主共和国）からの浸透に南ベトナムが対処するのを支援するために、大規模な米軍を送りたくもなかった」とラスクもいう<sup>14</sup>。

テイラー (Maxwell D. Taylor) 統合参謀本部 (JCS) 議長によればそれは「朝鮮戦争の記憶」のゆえだった。また、キューバをめぐる「モスクワとの身の毛もよだつ対決をなんとか切り抜けたばかり」のケネディが再度の危機を望まなかったと、国務省政策企画部長ロストウは考えている。ジュネーブ協定の存在もあった。ケネディ政権が南ベトナムへのジェット戦闘機供与を拒否した際にヒルズマンがいったように、「ICC (国際監視委員会) の不安定な小舟を必要以上に揺らしたくない」というのが彼らの立場だった<sup>15</sup>。ケネディの演説起草者だったソレンセン (Theodore C. Sorensen) は、ケネディがけっして「ベトナムに米国の戦闘師団を送ることを許可しなかった」ことを強調している。だから逆に、ケネディが早めに戦闘部隊を投入していたら、その後の事態悪化は避けられたはずだとの批判さえある<sup>16</sup>。

早くからケネディは、アメリカが東南アジアに「過剰介入」していると感じていた。ギルパトリック (Rowell L. Gilpatrick) 国防長官代理は「彼はそもそも初めから、人員の増派に嫌悪を示していた」と回顧する。ケネディの政界入り以来の側近、オドンネル (Kenneth P. O'Donnell) も、大統領が「ベトナムでこれ以上の介入を避ける決意を繰り返し表明」するのを聞いていた<sup>17</sup>。「南ベトナムの内戦を『アメリカ化』もしくは国際化する希望は持っていなかった」(ソレンセン) 大統領は、国務省でもっぱらベトナム政策を担当するヒルズマンに「何よりも避けたいのはベトナムをアメリカの戦争にしてみようこと」だと繰り返し述べ、「アメリカの介入規模を最小限に抑え、機会が訪れればすぐさま引き上げられるよう」にと指示を与えたという<sup>18</sup>。

コルビー (William E. Colby) CIAサイゴン支局長 (のち長官) によれば、ケネディ政権が鳴り物入りで「反乱

鎮圧 (Counterinsurgency)」戦略を導入したのも、「大規模な軍事力の衝突に代わるものの模索」の結果だった。もっともそこには、当時まだベトナムが「スロー・モーションの危機」(マクナマラ)にすぎなかったという背景がある。「共産主義者の活動は彼(ケネディ)の死後に比べて非常に程度が低く、南ベトナムのゲリラ活動が主体で、北からの大規模な干渉はなかった」(ソレンセン)からである。だからティラー統合参謀本部議長は一九六六年、上院外交委員会の公聴会で「南ベトナム軍以外にわが空軍を使わずに、またわが戦闘部隊を導入せずに、南ベトナムでベトナムの脅威に対処できればいいのだが」と自分たちが期待していたと述べている。<sup>19)</sup>

### 拡大・深化する介入

一九六三年一月初め、ベトナムには約一万六五〇〇人の米軍要員がいた。ラスク國務長官はそれを「アメリカ政府の深い関与」と呼ぶのに躊躇していない。<sup>20)</sup>一九六一年初頭まで、その数はジュネーブ協定によって六八五人に制限されていたのだが、この拡大にも「当時ほとんど反対論はなかった」とラスクは回顧する。しかも、ボール (George W. Ball) 國務次官やソレンセンによれば、さらに数千人が増派される予定だった。ケネディが必死に歯止めをかけたように、またできれば下げようと試みた軍事顧問数の上限は、一九六三年夏まで省庁横断のベトナム対策作業班の長をつとめた國務省極東局のウッド (Chalmers B. Wood) にいわせれば「もし戦争が突然悪化の方向に転じれば、われわれは上限を撤廃しなければならず、その後国防省はさらに兵力増強に突進しなければならないだろう」という程度の制約にすぎなかった。<sup>21)</sup>

CIAの情報分析官クーパー (Cester L. Cooper) は、ケネディ政権期には「アメリカ人顧問や装備が毎週ベトナムに流れ込んでいた」という。シュレジンガーによれば、「顧問たちは群れをなし、タイプライターからヘリコプター

まで現代戦争の武器を携えて」ベトナムにやってきた<sup>(22)</sup>。のちに米陸軍がまとめた戦史によれば、それは兵站システムの確立が追いつかないほどの速度だった。当時ベトナムで勤務していた米特殊部隊要員の一人はのちに、ナチャン、ダナン、カムラン湾といった基地を訪れるたびに施設や人員などが「キノコ雲のように」膨らんでいったと回想している<sup>(23)</sup>。

そもそもケネディ政権は、ギルパトリックによれば「軍事顧問をいくつかの省都に座らせておくのではなく、深いところに配備する」、つまり省や村落レベルで日常的に活動させる必要を痛感していた。一九六二年早々、米軍事顧問は南ベトナム政府軍の大隊レベルに張りついていたと、平定作戦 (Pacification) を担当していたローマー (Robert W. Komer) はいう<sup>(24)</sup>。この年半ばまでには「南ベトナム全土」で、そして「あらゆる主要な部隊」と共同で活動していた。一九六三年中頃にはたいいの軍事作戦には米軍事顧問が一人以上同行していたし、「ベトナム政府による活動の、文字どおり無数の分野」にアメリカ人がいた。警察、諜報、港湾管理、空港、放送、映画制作、出版、交通、高速道路建設、鉄道管理、教育、厚生保健、産業育成、銀行運営、徴税、地方開発、養豚、財務管理などである<sup>(25)</sup>。

のちにヒルズマンは、人口約二千万の国に一万六千人あまりでは「たいいのベトナム人はアメリカ人を一度も見えない」計算になる、と軍事顧問の増派をまったく問題視しない口ぶりだった。しかも実際に戦場で活動していたのはせいぜい一割強で、大部分は兵站任務だった。だから軍事援助司令部 (MACV) のハーキンス (Paul D. Harkins, Jr.) 司令官もつねづね不満を漏らしていたのである<sup>(26)</sup>。

しかしたとえ一部でも、アメリカはすでに「本物の戦闘への従事」を開始していた。危険を感じれば先に発砲する許可も与えられていた<sup>(27)</sup>。早くも一九六二年初め、モース (Wayne Morse) 上院議員はノルディング大使に、「星条旗で覆われたアメリカの青年の棺を乗せて船が西海岸に戻り始める」事態を懸念している。一九六三年夏、「米兵士が

かなりの数南ベトナムに投入され、損害を受けている」(ロストウ)ことは無視できなくなりつつあった。一九六三年一月までに、戦死者は七八人を数えている。<sup>(28)</sup>

メクリン是一九六三年のベトナムについてこう回想する。「ここには戦争が存在していた。当時としては唯一アメリカが関与する戦争であり、アメリカの軍事および文民要員が二万人近く投入され、アメリカの納税者に年間五億ドルの負担を与えていた」。なるほどケネディは戦闘部隊の派遣には抵抗した。だが将来にわたって明確に派兵の可能性を否定したわけではない。実際、ケネディは「つまるところ南ベトナム人が救われるとすれば、彼ら自身が戦争に勝たなくてはならないのだという根本的原則を維持できなかった」のだとマクナマラはいう。<sup>(29)</sup>

あるとき、政府高官の南ベトナム訪問をめぐる報道に苛立ち、それが介入拡大につながることを懸念するケネディは「それこそまさに私がやりたくないことだ」とヒルズマンに語ったという。だが実際には、それこそまさに彼が行ったことだった。だからラスクは軍事顧問の増派を「南ベトナムの安全のために米軍を投入するという基本的決定」と呼ぶ。ワシントンで一九六三年八月以降、ベトナム対策作業班を引き継いだカッテンバーグもまた、「わが国にとつて六〇年代の悪夢となったものにわれわれを導いた主たる責任はケネディ政権にある」と断言するのである。<sup>(30)</sup>

じよじよに深みに

ケネディは確信をもって介入を拡大・深化させたわけではない。むしろその逆だった。南ベトナムを保持しなくてはならないが、アメリカを泥沼の介入に陥らせたくはない。そのジレンマからほとんどつねに妥協策に終始し、困難な決定に直面することを嫌って決断を先延ばしにした。ベルリン、キューバ、コンゴなど数多くの危機に見舞われたことも手伝って、ベトナムにかんしては現状維持と場当たり的な対応に終始にした。<sup>(31)</sup> ケネディの夫人ジャクリーン

(Jacqueline Kennedy) はあるとき、なぜケネディがベトナムに引きずり込まれるのかと聞かれ、夫が「弱い人」だからと答えたという。<sup>37)</sup>

だがその間にも、ベトナムへの介入は日ごとに強化されていった。ポール國務次官はそれを風船にたとえ、「どんな上がつていき、一部の好戦的な連中が望んだほど速く上昇したわけではなかったが、成層圏に向かっていることは確かだった」と述懐している。ロジは一九六三年八月のサイゴン着任当時について「どのようにしてそうなったかはともかく、アメリカ人はベトナムに存在し、戦闘中だった」と述べている。だがベトナムはそれ以前、かなり早い段階から「アメリカ人が顧問としてではあるが撃ち合いの戦争に従事する場所」(マクナマラ) だった。メクリンが認めるように、「助言 (advice)」という言葉の意味はもはや「戦争 (warfare) の一形態」も同然だったのである。<sup>38)</sup>

ポールはのちに、こうした介入深化の過程をケネディが本当には理解していなかったのではないかと、といぶかしんでいる。カッテンバーグも、政権が掲げた政策「ニュー・フロンティアが、事実上アメリカの国境をタイとともにインドシナの国境にまで拡張始めた」のに、ケネディに限らず「ほとんど誰も気づかなかった」という。いっぽうシュレジンガーは、大統領が「小さな妥協が彼を翼に導きつつあることを感じ始めていた」と述懐する。一九六二年にラオス中立化を実現させ、一九六三年四月には國務次官となったハリマン (Averil W. Harriman) は、ケネディが「亡くなる前に、すでにわれわれが深みにはまりかけていることを心配していたものと信じる」と述べている。<sup>39)</sup>

### 虚構の戦争

実際にはケネディは、サリンジャー (Pierre Salinger) 報道官のいう「アメリカ人が死んでゆく『戦争でない戦争』」への対処に腐心していた。一九六三年三月の時点で、ラスク國務長官はサイゴンにあって、「これがわれわれの戦争だ

という一般的な考えを生み出すような措置を避ける」ことが最重要だとしながらも、「われわれはすでにそうした立場にあまりに近づきすぎている」との懸念を伝えていた。だからこそラスクは外に向かつては、アメリカが担っているのは補給や訓練など「限定的な、支援の役割」にすぎず、「軍事要員の多くは——文民の一部も——戦闘のなかで砲火を浴びているし、損害も出ているが、わが国は戦闘部隊そのものは南ベトナムに置いていない」と強調しなければならなかったのである。マクナマラ国防長官も、アメリカは「ベトナム軍がベトコン打倒に全力を尽くせるよう、訓練および兵站面の支援であらゆることを行っている」にすぎないと力説した<sup>(35)</sup>。

だが、「アメリカのベトナムでの介入を最小限に保ち、さらに実際より小規模なものに見せたいという、米政府がかねて抱いてきた欲求」は、さまざまな、姑息ともいえるごまかしを生んだ<sup>(36)</sup>。ジエム政権の面子への配慮や敵側の反米宣伝への警戒もあって、基地では星条旗は掲げられなかった<sup>(37)</sup>。米軍事顧問は、街ではたとえ軍服を着用しても丸腰だった<sup>(38)</sup>。与えられる勲章にも制限があり、たとえ命を失っても戦死扱いされなかった<sup>(39)</sup>。米軍機のマークは「赤と黄色のちよつとしたペンキだけで」南ベトナム空軍のものに塗り替えられ、万一の場合に備え、あくまで訓練中と強弁するため後部座席にベトナム人を乗せて出撃していた<sup>(40)</sup>。ある英記者は、米政府が記者たちに「アメリカ軍事顧問が単なる顧問であること、アメリカは戦争には積極的に立ち入っていないこと、ディエム<sup>マ</sup>の民主主義の解釈はやや危なっかしいが、何とかうまくやっている、という考え方」を押しつけようとしていたと述べている<sup>(41)</sup>。ワシントンもサイゴンも、戦争の拡大や米顧問による戦闘への参加、戦争のアメリカ化をめぐる報道に神経をとがらせていた<sup>(42)</sup>。

ケネディの元側近たちは、「われわれの戦闘要員は南ベトナム軍に貼りついたグリーンベレーの『顧問』だった。ベトナムには米戦闘部隊はまだいなかった」（オドンネル）、米軍事顧問は「後方、兵たん勤務の者を除けば戦場に出て、南ベトナム軍を訓練、指導していた」けれども「これら将兵は戦闘部隊ではなかった」（ソレンセン）などと、

故大統領の弁護に余念がない。ノルティング大使も、米顧問が訓練の必要上、戦場に身をさらし犠牲を甘受したからといって「米兵が戦争を戦っているということの意味してはなかった」と述べている。<sup>43</sup>

ケネディ政権は当時も同じ考え方に固執していた。一九六三年始め、アメリカによる戦闘への関与報道に神経をとがらせるラスク國務長官は、サイゴンの米大使館にあてこう訓電を送っている。「わが国の政策は依然として、ベトナムにおけるアメリカの役割は厳密に助言、兵站、訓練分野に限られているというものである。……アメリカが戦闘任務を遂行していると解釈される可能性のある活動については、記者たちと話してはならない。この政策は対ベトナム援助の増強が始まったとき、最高レベルで定められたものである。それは変更されていない」<sup>44</sup>。だがそれは壮大な虚構にすぎなかった。ある米軍事顧問が一九六三年末、家族に書き送ったように、当時「汚い小さな戦争」と呼ばれていたものは、じつは「大きな、胸くその悪い戦争」になっていた。ケネディにたとえ介入限定の意図があつたとしても、彼はそれを現実の政策には十分反映させていなかったのである。<sup>45</sup>

## 二 ベトナムからの引き揚げ

一九六五年までに完全撤退を

ベトナムでの戦いを「彼らの戦争」と呼んだのと同じテレビ・インタビューで、ケネディはベトナム撤退論について「それは大きな間違いだ」と二度繰り返している。<sup>46</sup>それ以前にも記者会見で彼は、戦争遂行の「努力から手を引くことは南ベトナムだけでなく東南アジアの崩壊を意味する」し、「東南アジアから引き揚げ、それを共產主義者に引き渡すのでない限り」南ベトナムを含む諸国への支援は止められないと表明していた。<sup>47</sup>

しかしそれでもシュレジンガーは、時を追うごとに「引き揚げがますます大統領の目標となつていった」と断言する。<sup>(48)</sup>その理由は要するに、このままでは勝てないということだった。一九六三年秋、ケネディはある記者に「ベトナムではわれわれに将来はない。連中はわれわれを蹴り出そうとしている」と語っていた。死の直前、私的な場では、勝てる確率は「一〇〇対一」だとさえ漏らしていたという。<sup>(49)</sup>

いつ頃ケネディがベトナム政策の前途に不安を抱き、引き揚げの決意を固めたかについては諸説がある。早くも一九六三年初頭、ケネディの依頼でベトナムを視察したばかりの親友マンسفールド (Mike Mansfield) 民主党上院院内総務による悲観的な報告の影響を重視するもの。<sup>(50)</sup>五月にジエム政権の仏教徒弾圧に端を発する危機が始まった後、つまりほぼ一九六三年半ば頃とするもの。<sup>(51)</sup>南ベトナム情勢が混乱の度を深めた晩夏から初秋にかけてとするもの。<sup>(52)</sup>一〇月末、ケネディがどうせ出ていくのだからと、反ジエム・クーデター後にどのような政府が樹立されるかにまったく無関心だったことを重視するもの。<sup>(53)</sup>一月初め、クーデターによるジエムと弟ニユー (Ngo Dinh Nhu) の殺害に衝撃を受け、ベトナム政策の徹底的な再検討と、撤退の意志をはっきりと固めたとするもの。<sup>(54)</sup>ケネディ暗殺の直前、ベトナム政策関係者がホノルルに結集して開かれた会議こそ「引き揚げの基礎をつくる」(シュレジンガー) 目的だったともいう。<sup>(55)</sup>

しかし政治家ケネディは、即時撤退に踏み切るわけにはいかなかった。一九六三年春、ケネディは撤退を主張するマンسفールドに同意を示しつつも、「だが一九六五年まではできない——再選されるまでは」と語っている。その直後、大統領は側近のオドンネルにこう漏らしたという。「一九六五年には、私は史上最も不人気な大統領となるだろう。私はどこへ行っても共産主義者に宥和したと非難されるだろう。そんなことは構わない。いまベトナムから完全撤退しようとするれば、ジョー・マッカーシー [Joseph R. McCarthy] の赤の恐怖をまたも招くことになる。だが



再選後なら可能だ。だから絶対、に再選されるようにすればいいのだ<sup>(56)</sup>。ケネディは四月にもある記者に、一九六二年のラオス中立化に続いてベトナムまで失えば再選など無理であり、「一九六四年より前にベトナムを放棄できない」と述べたという。つまり二期八年の任期さえ確保しさえすれば、その後は「不人気になっても構わないし、ベトナムから米軍を完全に撤退させられる」というわけである<sup>(57)</sup>。

一九六〇年、一二万票の僅差でホワイトハウスへの道を勝ちとったケネディは、一九六四年には「平和と繁栄」を争点として圧勝をおさめる心づもりだった。その彼にとって共產主義に対して弱腰だとの非難は禁物だった<sup>(58)</sup>。実際に共和党は一九六二年の中間選挙でケネディを、第二次世界大戦で苦境のイギリスを救ったチャーチル（Winston S. Churchill）のように語るが、対ヒトラー（Adolf Hitler）有和政策で知られるチェンバレン（A. Neville Chamberlain）のように振る舞うと非難している<sup>(59)</sup>。

一九六三年九月、ケネディのベトナム政策への支持は三八%どまりだった<sup>(60)</sup>。国内には公民権問題という頭痛の種があった。その結果、とくに民主党の地盤だったはずの南部にケネディからの離反傾向が強く見受けられた<sup>(61)</sup>。だからこそ彼は一九六三年秋、テキサス州を訪れなければならなかったし、再選の見込みを減少させかねない問題、たとえばベトナムが選挙の重大争点とならぬよう、大きな、議論を呼びそうな決定は遅らせるのが賢明に思われたのである<sup>(62)</sup>。

#### いくつかの疑問

だが、ベトナム完全撤退というケネディの決意を強調する見方には、少なからぬ批判がある。第一に、オドンネルの回想以外に、これといって信憑性のある証拠がほとんどない<sup>(63)</sup>。しかもそれは暗殺後数年を経て表明されたもので、他の部分の記述にも明らかな政治的意図が見受けられる<sup>(64)</sup>。オドンネルがケネディ家のいわば大忠臣であり、末弟エド

ワード (Edward M. Kennedy) 上院議員にまだ大統領選出馬の可能性があったことを考えても、その内容はかなり割り引く必要があろう。ラスク国務長官は逆に「私はジョン・ケネディと何百回も東南アジアについて話す機会があったが、ただの一度も彼が撤退を示唆したことはなく、かすかにほめかしたことさえなかった」し、「完全撤退という選択肢、つまり共産主義者による南ベトナム蹂躪の容認をわれわれが真剣に考慮したことは一度もなかった」と述懐している。<sup>(65)</sup>

第二に、ソレンセン、シュレジンガーら、元側近たちが行う同様の主張も、じつは暗殺直後に刊行された彼らの回想録ではなく、一九六〇年代末以降の著書から登場したにすぎない。<sup>(66)</sup>ケネディの話を直接聞いたとされるマンスフィードの話も、「彼は翌〔一九六四〕年元旦から軍隊を引き揚げ始めるつもりだった」(一九七八年)、『大統領選後にはベトナムからの米軍の部分撤退開始を検討するつもりだ』と、大統領は明確にそう語った(一九九九年)と、微妙に揺れ動いている。<sup>(67)</sup>

大統領にまで登りつめた政治家であるケネディは、相手しだいと言うことを変え、またさまざまな言葉で相手の反応を探るすべを心得ていた。「誰一人として十分に大統領を知っていた者はいなかった」と、駐インド大使となった経済学者ガルブレイス (John K. Galbraith) もいつている。<sup>(68)</sup>ときに「プリズム」とさえ表現される、どのようにも解釈できる彼の言葉じたい、介入拡大と撤退をめぐる逡巡の反映にすぎなかった可能性もある。<sup>(69)</sup>

マクナマラ国防長官は一九六四年になって、「好ましい状況であろうと悪かろうと六五年までにベトナムで店じまいする」のが自分とケネディの間での理解だったと述べたという。<sup>(70)</sup>だがケネディは一九六三年九月、アメリカは「戦争の敗北を座視するためにそこにいるわけではない」と記者会見で言明している。表向き発言だけではない。その直前、ホワイトハウスのM・バンディ (McGeorge Bundy) 国家安全保障担当大統領補佐官は国務省のヒルズマンと

の間で「重要なのは戦争に勝つこと」だと一致していた。同じ日、ラスクはサイゴンに向け「アメリカはベトナムを放棄することはできない」と打電した。<sup>(7)</sup>

ソレンセンは、「良かれ悪しかれ、熱意にあふれてか嫌々かはともかく、退却やわが国のコミットメント放棄以外の条件で出て行けるようになるまでは、そこにとどまらなくてはならないと大統領は強く感じていた」という。大統領の次弟ロバート（Robert F. Kennedy）司法長官も、兄はアメリカが「ベトナムに存在するには強力な、他を圧倒する理由があると、そしてベトナムで戦争に勝つべきだと感じていた」と回想している。「ケネディ大統領の死の日まで、未完の責務を残して撤退を考慮し始めることを真剣に提唱した者は、政策決定にたずさわる中には誰一人いなかった」というのが、W・バンディ国防次官補の弁である。つまり「『ことをやりとげる』意志」（カッテンバーグ）はケネディ政権首脳に共通していたのである。<sup>(8)</sup>

### 引き揚げをめぐる激論

戦争の前途を悲観し、引き揚げを提唱する者も皆無ではなかった。一九六三年八月三十一日、その直前ベトナムを視察し、ジェム政権に失望しきったカッテンバーグはホワイトハウスでの会議で、サイゴンのロジ大使やトルーハート（William C. Trueheart）代理大使とも一致した意見として、アメリカが「六ヶ月から一年の間に」ベトナムから追い出されることになろうと述べた。「出て行かざるをえなくなる」くらいなら、むしろ「威厳を保ちながら出て行つたほうがよい」というのが彼の主張だった。<sup>(9)</sup>

九月六日、国家安全保障会議（NSC）では、ロバート・ケネディが発言した。ジェム政府に問題があつて勝てないのなら政権交替を考えるべきだが、もしどのような政府でもベトナムの共産支配を阻止できないのであれば「いま

こそベトナムから完全に出て行くべき時」だとの考えを披瀝したのである。それまでロバートは公民権問題などに忙殺され、ベトナム問題にはほとんど関与していなかった。しかし八月末、「いまやベトナムにおけるアメリカの政策が危地に陥っており、ジョン・ケネディは弟がそばにいてくれるのを望んだ」のだとシュレジンガーはいう。事態の深刻さを知ったロバート自身も、介入政策に強い疑念を抱くようになったのだといわれる。

二人の主張に強く反発したのがラスク國務長官である。彼は「戦争に勝利するまではベトナムから出て行かない」という明確な態度だった。<sup>(76)</sup>「われわれがいなくてもジェムが戦争に勝てる」可能性はないし、その結果ベトコンが南ベトナムを奪取すれば、アメリカは「本物の困難」を抱え込むことになるからだった。<sup>(77)</sup>ラスクはのちに、一九七三年に米軍が撤退しても東南アジアに平和などもたらされなかったではないかと主張している。ラスク、マクナマラ、ジョンソン副大統領らの猛反対を受けたカッテンバーグは、彼らが「庭の小径を悲劇に向かって歩きつつある」ように感じた。だがラオスで中立化実現に尽力したハリマンでさえ、多少の意見の違いはあってもワシントンには「尻尾を巻いて逃げる者は一人もない」のだとロッジ大使を激励している。<sup>(78)</sup>

アメリカの目標は「安全かつ独立した南ベトナム」の建設であり、それこそが「われわれが出て行く条件」だった。その条件が整う前に「アメリカが引き揚げれば戦争遂行にとって即座に災厄となる」と思われた。<sup>(79)</sup>だから引き揚げを論じることじたいがむしろ「タブー」に近かった。だからせっかくのロバート発言も「しばらくの間揺らめいていたが、やがて消え去った」(シュレジンガー)のである。ワシントンだけでなく、ベトナムのアメリカ人たちの多くも撤退など受け入れられなかったと『ニューヨーク・タイムス』記者として取材にあたっていたハルバースタム(David Halberstam)はいう。<sup>(80)</sup>

## 選挙の影に怯える

ケネディの最優先課題、再選を左右するのはいうまでもなく世論のはずだった。一九六三年秋、米国民も議会もメディアも、ケネディ政権のベトナム政策に批判を強めつつ、だが基本的には南ベトナム防衛を是認し、アメリカが撤退すべきではないとの立場だった。<sup>(81)</sup>この年夏、ハリス世論調査では、むしろ大規模な米軍派遣さえ二対一の割合で支持が集まっていた。アメリカにはそうした責任がある、というのが超大国の国民である彼らのいわば常識だった。のちジョンソン政権のベトナム介入拡大に疑念を呈したフルブライト (J. William Fulbright) 上院外交委員長でさえ、一九六三年九月のテレビ出演で「現段階でのわが軍の撤退は……受け入れられない」と述べている。<sup>(82)</sup>

しかし一九六三年は、米国民がベトナム情勢の展開に不安を抱き始め、その結果まだ萌芽段階とはいえ反戦気運が初めて生じ、のちの大規模な反戦運動の基礎が築かれた年だったと指摘されている。<sup>(83)</sup>事実、三月の時点でラスクは「ベトナムにおけるアメリカの戦闘任務に堪える米国内での関心の高まり」に懸念を示していた。戦闘部隊派遣への強い支持は夏を境に減退していった。<sup>(84)</sup>

秋になると、ベトナム介入そのものを否定しないまでも、そのコストがアメリカの死活的な利益に見合うかどうか、このままで勝てるのかどうか疑問を呈する新聞や雑誌が増えてきた。のち民主党大統領候補となるマクガバン (George S. McGovern) 上院議員のように、「アメリカの立場はきわめて急激に悪化しており、わが国の兵力と援助をこの国から引き揚げるのが国益にかなう」と発言する者も現れた。<sup>(85)</sup>十一月、クーデターでジエム政権が倒れた直後のハリス世論調査では、撤退論が介入拡大論をうわまわった（三七％対三三％）。だが米国民にとってベトナムはその数年後ほど身近な問題ではなかったし、いずれとも決めかねていたというのが実際のところだったように思われる。<sup>(86)</sup>

ケネディの周辺では一九六四年の対立候補は保守派のゴールドウォーター (Barry M. Goldwater) 上院議員と目や

れており、そうなれば圧勝が見込まれていたと、ケネディの秘書リンカーン夫人 (Evelyn Lincoln) は述懐する。ケネディはキューバ危機の克服で十分な力強さを示し、部分的核実験停止条約という成果で平和と米ソ緊張緩和への道筋を示していた。<sup>(87)</sup> 中国共産化直後とは時代環境も異なることから「米国内でマッカーシー時代の再現はないだろう」(メクリン) との見方もあった。むしろ公民権や経済といった国内問題が本当の争点となるはずだったといわれる。<sup>(88)</sup>

ケネディがもし再選を危うくすることを恐れて撤退を一九六五年以降に設定したとすれば、まさしく枯れ尾花に怯えていたにすぎない。マクナマラがのちに作成を命じたベトナム政策形成にかんする秘密報告書、いわゆる『ペンタゴン・ペーパーズ (The Pentagon Papers)』の執筆やその暴露に関わったエルズバーク (Daniel Ellsberg) によれば、ケネディは「マッカーシーの赤のおどかし」を引きのばすだけで、避けたり減らしたりしようとはしなかった<sup>(89)</sup> のである。大統領といえども目に見える危機や大きな災厄によって失敗が明瞭にならないうちは動けない、要するに「タイミングが鍵」なのだとしュレジンガーはいう。だが、とすればなおのこと、国民を教育する努力を惜しんだ点でケネディは批判の対象となろう。だからラスクは、ケネディがベトナムから手を引いたはずだという主張に反駁し、「国内政治上の目的でアメリカ人を戦闘地域に残す」などおよそ大統領にあるまじき行為だと糾弾するのである。<sup>(90)</sup>

ケネディに政治的勇気がまったく欠如していたわけではない。彼は上院で部分的核実験停止条約の批准同意を得るためなら「一九六四年の選挙を犠牲にする決意だ」と漏らしたとしュレジンガーは述べている。また、「公民権問題のため来年の選挙に敗れるという世論調査結果」を手にしながら「これは道義の問題なのだから他に道はない」とも語ったという。<sup>(91)</sup> しかし、少なくともベトナムについてそうした政治的勇気はついで発揮されなかった。大統領は「ベトナムそれ自体を、どんな犠牲を払っても守り抜くべき目的と考えたことはなかった」とソレンセンはいう。<sup>(92)</sup> だが同時に彼は、どんな犠牲を払っても抜け出すべき厄介な問題とも考えてはいなかったのである。

## 三 段階的撤退計画

まず千人を引き揚げ

一九六三年五月六日、ホノルルで、定期的なベトナム政策関係者の会議が行われた。席上マクナマラ国防長官は、年末までに米軍要員のうち千人をベトナムから撤退させる計画の作成を命じた。<sup>(92)</sup>「緊急課題」としてこれに取り組んだ太平洋軍司令部は一日、年末までに一〇〇三人を引き揚げる計画を統合参謀本部に提出した。<sup>(93)</sup>九月三日、マクナマラは計画を承認したが、統合参謀本部の意向で最終決定は一〇月に持ち越された。<sup>(94)</sup>

一〇月二日、ホワイトハウスは、現地を視察したマクナマラとテイラー統合参謀本部議長の報告という形で、年末までの千人撤退を発表する。一月一六日にはサイゴンの米軍事援助司令部も公式に撤退計画を発表した。<sup>(95)</sup>その結果、米軍事顧問数は一〇月の一万六七三二人から一万五七三二人になる予定だった。一九六一年以来増加の一途をたどってきた数字が初めて減ることになったのである。<sup>(96)</sup>

この方針をケネディ政権として確認したのが、一〇月一日の国家安全保障覚書二六三号（NSA M 263）である。

この文書とともに千人の引き揚げ計画は、ケネディが戦争のアメリカ化をなんとしても回避しようとし、また最終的には完全に撤退する決意を固め、だからこそ彼が暗殺されたのだという決定的な証拠とされることが多い。<sup>(97)</sup>だが、そうした解釈に異を唱える者も少なくない。<sup>(98)</sup>マクナマラ国防長官自身、一九六四年初めに、この撤退計画が後戻りのきかないような、ベトナム完全撤退への第一歩ではなく、進捗は戦況しだいという面があったと認めている。<sup>(99)</sup>

たしかに、拡大する介入に梃をはめたいという意図がこの計画にあった。<sup>(100)</sup>五月のホノルル会議の直前、国務省極東

局のウッドは、「これ以上のいかなる増強にも拒否権を行使し、事実上わが軍に一万五六〇〇人という上限を設ける」ことを強く主張した。<sup>(四)</sup>千人の撤退とは、長期的には完全撤退を想定していたが、同時にエスカレーションを求めて高まる現実の圧力に抵抗し、とりあえず現状を凍結するという意図の反映でもあった。

### 世論対策と圧力装置

千人の撤退は世論対策としても重要だった。一九六二年末から翌年初めにかけてワシントンからベトナムに赴いたヒルズマン極東担当國務次官補と国家安全保障会議スタッフのフォレストル (Michael V. Forrestal) は、「一九六二年にかなりの進捗があつたことはわかつているが、大統領選挙が近づいてきており、政権はより急速な進歩を望んでいる。大統領はベトナムで年に三億五〇〇〇万ドルを費やしていること、とくにメディアがわがほうの進捗や政策について暗い見方をしていることを憂慮している」とノルディング大使に語つたといふ。<sup>(四)</sup>

一九六三年五月のホノルル会議でもマクナマラは、段階的撤退計画を「ベトナムでの努力に米国内の支持を継続して得るためには必要」な措置だと規定した。<sup>(四)</sup>一〇月、ベトナム視察を終えた彼は大統領に「この地域から引き揚げる手段を持たなければならず、またわが国にその手段を示さなければならぬ」と訴えた。「年末までに」との明言を当初決つた大統領に対し、マクナマラは「米軍戦闘要員を南ベトナムでのゲリラの活動の前にさらけ出す可能性を減らす計画が実際にあると、議会と国民に向かつていえる」ことが大事なのだと説得したのである。<sup>(四)</sup>そもそも撤退計画が浮上したのは一九六二年七月のことだが、いつまでもベトナム介入に米国民の支持をあてにはできず、むしろ米軍事顧問の損害が増大すれば引き揚げへの圧力が高まるとの予想が一つの要因だった。<sup>(四)</sup>

たとえ一部であろうと米軍事顧問が撤退すれば「ニュースになる価値がある」はずだった。それはベトナム軍の訓



練がきわめて順調に進み、彼らが「プロフェッショナルとして自立する段階」に達したという証拠として提示されるはずだった。<sup>(8)</sup>四月、ホワイトハウスを訪れたイギリス人のゲリラ戦専門家トンプソン（Robert G. K. Thompson）は、千人の引き揚げが持つ効用の一つとして、「わがほうが勝っていると示す」ことを挙げている。つまり軍事顧問の撤退は、戦争遂行、勝利への手段でもあった。<sup>(9)</sup>

だから重要なのは、「最大限の心理的効果を得る」ことだった。つまりフェルト（Harry D. Felt）太平洋軍司令官がホノルルで提出した計画に示されたように、「最大限報道される」とともに「軍事作戦への影響を最小限にとどめる」ことが求められたのである。<sup>(10)</sup>そのために、千人の撤退は一度ではなく数次に分け、しかもそれぞれ十分報道の対象となるような規模で実施されるはずだった。<sup>(11)</sup>それまでアメリカはベトナムに何人の軍事顧問がいるかも必死に伏せてきたが、ここにいたって初めて実数を公表した。千人撤退という事実<sup>(12)</sup>に信憑性を得る代償である。その甲斐あってか千人撤退のニュースはかなり大きな扱いを受けたが、同時に楽観論への批判も生んだ。<sup>(13)</sup>重要なのは、政権の意図としては、あくまでも撤退計画の報道は「抑えた調子で」行うものとされたことである。<sup>(14)</sup>メディアもまた、戦争遂行のために利用すべき存在だったからである。

千人の撤退を皮切りに一九六五年までに完全撤退、という期限が定められた動機の一つは、南ベトナムのジエム政府に対する「圧力装置」が必要だったからである。テイラーによれば、それは「もし彼〔ジエム〕のやり方の失敗のために諸計画が遅滞するようなら、われわれアメリカ人は、自分たちが際限なくベトナムにとどまり、自分たちの役目を果たしたのち彼がそれに追いつくのを待っている義務はないと考えるようになるだろう」という警告だった。ベトナム人たちもそれはよく理解していた。ジエムがクーデターで倒された後、ヒルズマンは撤退声明がジエム政府に圧力を及ぼすためだったと認めている。<sup>(15)</sup>だが実際にはその圧力は「たいして効果はなかった」とコーマーはいう。そ

れどころか、ケネディ暗殺直後、ジョンソン新大統領らとの協議に臨んだロッジ大使が認めたように、一九六五年までに撤退するという意図を示したことが「クーデターを促した」のである<sup>(14)</sup>。

### 楽観にもつづいた計画

一九六三年五月、ホノルルでマクナマラがいったように、年末までに千人撤退という政策には「情勢の改善にともなつて」という条件がついていた。その直後、ラスクはサイゴンの米大使館にあって、それが可能かどうかは「今後の進捗しだい」だと伝えている。具体案の作成にあたつた太平洋軍司令部は一〇月、統合参謀本部に「反乱鎮圧作戦の進捗がそうした行動の根拠となれば」撤退命令が下されるものとした。大統領自身、記者会見で「もしそうすることが可能なら」と付け加えている。サイゴンの政治状況が悪化せず、戦争遂行が順調に進み、ジェムが必要な改革を実施するなど、いくつかの前提条件があつたのだが、それが「不幸なことに見過ごされたか、あるいは忘れ去られた」とテイラーはいう<sup>(15)</sup>。

一九六五年末を期限とする完全撤退も同じである。ウッドは「もし六六年や六七年に戦争が期待以上にうまくいけば、いつでももつとたくさん引き上げることができる」と述べている。また、「北ベトナムの共産主義政権がベトナム共和国を破壊する作戦を止めさえすれば」南ベトナム防衛をめざすアメリカの行動は不必要になる、というのがケネディ政権の一貫した立場だつた<sup>(16)</sup>。一九六五年までの撤退もまた、いくつかの条件に支えられた、可能性の一つにすぎなかつたのである。だが一〇月のホワイトハウス声明では、原案にあつた「軍事面の進捗が続けば」という文言が、最後になつて削られた<sup>(17)</sup>。その結果、一九六五年が「アメリカによる任務のうち軍事的側面が完了する目標期限」（テイラー）として一人歩きした。それがケネディ政権を拘束し、またこれ以後ケネディのベトナム政策をめぐる評価に

も大きな影響を与えた。まさにそれは「ブービー・トラップ」（クーパー）だったといつてよい。<sup>(118)</sup>

千人を手始めとする段階的撤退計画そのものが「多幸症と樂觀論」の産物だったと『ペンタゴン・ペーパーズ』はいう。<sup>(119)</sup>その発端は一九六二年七月二三日のホノルル会議で、マクナマラが「南ベトナムでベトコンを支配下に置けるまでに約三年」と見積もったところにある。つまり「南ベトナムの軍と民兵が完全に作戦可能状態となり、あらゆる地域でベトコンを圧迫し始めてから一年後」には勝利が得られると踏んだのである。<sup>(120)</sup>

最初用意された計画は、一九六八年までに米軍要員を一五〇〇人程度に減らすというものだった。それがマクナマラの強い意向で、一九六三年初めには、「一九六五年末までに南ベトナム軍がわが軍の助力なしに国土を掌握できる」ようにし、「同時並行で段階的にアメリカの支援要員を引き揚げ、最後は軍事援助顧問団の要員ほぼ一六〇〇人を残す」計画に加速された。<sup>(121)</sup>一九六二年七月の会議はケネディ政権の「樂觀論の総決算」だったとさえいわれる。<sup>(122)</sup>だがそれは同時により大きな樂觀への始まりでもあった。

一九六三年初め、ホイラー（Earle G. Wheeler）陸軍参謀総長らの調査団はベトナム視察後に数多くの改善や進捗を報告した。その結果、「一九六五年という目標はさほど野心的すぎるといわけではないという希望」が強まったとテイラーは回顧する。五月、ホノルル会議でマクナマラは、立案中の計画による撤退のペースが「あまりに遅すぎる」とし、一九六六会計年度以前に米軍要員を「最小限の水準」まで落とすよう求めた。<sup>(123)</sup>マクナマラはのちになっても、「一九六一年二月から一九六三年夏までの時期は、南ベトナム国内で大きな進歩がなされた時期」だったと述べている。<sup>(124)</sup>

撤退計画は「南ベトナム総合計画」と呼ばれる、ベトナム軍活性化の大事業と一体の存在だった。それは、「ベトナム共和国軍が十分熟練度を増し、質を向上させて、その機能を果たせるようになるのにともない」可能になるとい

う条件に支えられていたのである。つまり「南ベトナム人が自分たちで仕事ができるようになればすぐ」（フォレスタル）アメリカは出て行ける、ということである。<sup>(12)</sup>一〇月二日のホワイトハウス声明も、訓練計画の進展を千人撤退の根拠に挙げていた。しかもそうした改善や戦争遂行を「政治情勢が大きく阻害しない」という前提があつた。<sup>(13)</sup>同時に、ベトナム側に対してアメリカがいつまでもいないと示すことで自立を促し、またヒルズマンがベトナムの外交官チャン・カン・タン（Tran Khanh Thanh）に述べたように「じょじょに仕事を引き継げるのだと示すことでベトナム人を鼓舞する」意味もあつた。<sup>(14)</sup>

実際に一九六三年夏、統合参謀本部で反乱鎮圧を担当するクルラック（Victor H. Krulak）将軍は、南ベトナム軍の訓練はすでに「頂点を越えた」と自信たつぷりだった。だから米軍事顧問の役割や数が減るのも「論理的な見通し」のはずだった。ハーキンス将軍も、千人程度を引き揚げたところで「戦争遂行に悪影響を及ぼさない」と確信していた。<sup>(15)</sup>ケネディの後を継いだジョンソン大統領は「時が経つにつれ、それが正しい前提かどうか、疑問が増していった」というが、それでも彼の「助言者たちのほとんどは、次の二年で南ベトナム人が、いまわが軍が行っている訓練、兵站、支援任務を引き継げるようになるはずだと信じていた」のである。<sup>(16)</sup>ケネディの死から一〇日後、ハーキンス将軍は「ベトナム軍要員の訓練が進み、米軍の一部撤退を可能にした」として、第一陣三〇〇名の引き揚げを発表した。マクナマラは一九六四年初め、翌年末にはベトナム軍の訓練を始めてからまる四年になるので、「その時までには訓練任務をほぼ達成しているはず」だと、相変わらずの調子だった。<sup>(17)</sup>

## 机上の空論と化す

すべての人々が樂觀を共有していたわけではない。マクナマラによれば、「南ベトナム人の訓練は可能としても、われわれによる訓練はまだ結果を達成するほど長期にわたって行われておらず、したがって現在の水準で継続すべき」だとして、時期尚早な撤退に反対する声もあった。また、「南ベトナムの喪失に、そしてかなりの確立でアジア全土の喪失につながりかねない」として段階的な介入縮小に異を唱える声も強かった。だがそれでも、クーパールのいう「一九六五年までに将兵の帰国を（Bring-the-boys-home-by-1965）」という空気は消えなかった。<sup>(13)</sup>

実際には一九六三年後半、政治的にも軍事的にも南ベトナム情勢は日ましに悪化し、アメリカの完全撤退など机上の空論になりつつあった。七月に軍事援助顧問団の縮小を是認したはずのクルラック將軍でさえ、「戦争のうち撃ち合いの分野は頂点に向かいつつある」ので、「われわれのベトナム人に対する兵站および戦術面の支援が近い将来大きく減少する余地はおそらくないだろう」と述べている。八月末、統合参謀本部はいわゆる仏教徒危機がおさまるまで撤収を見合わせてはどうかと提案した。<sup>(14)</sup>一〇月、マクナマラとテイラーのベトナム視察報告は、「いつ軍事的勝利が得られるかは依然として疑問」だとした。千人の引き揚げを発表したとき、ケネディ政権が一九六五年末までに軍事的努力が終わると想定しているのかと聞かれたサリンジャー報道官は、声明文に書いてあるとおりだと繰り返すのみで、千人を超えた規模の撤収の見込みについても何も答えなかった。<sup>(15)</sup>

ケネディの側近オドンネルは、一月初めのクーデターでジェムとニューの兄弟が殺された知らせを受けた後も大統領が撤退計画を変更せず、むしろ「ますますベトナム戦争から手を引く決意を固めた」という。<sup>(16)</sup>そのケネディの死後、一月二六日にジョンソンは国家安全保障覚書二七三号（NSAM 273）で、一〇月二日のホワイトハウス声明で表明された政策を維持する立場をとった。<sup>(17)</sup>千人がベトナムから引き揚げたのは一二月のことである。だが、実際には

千人が出国するのと同様にして、それとは別の措置としてそれ以上の軍事顧問がベトナムに送られていた。<sup>(106)</sup> 事実上段階的撤退計画は「静かに取り消された」(オドンネル)のである。翌年春までには、南ベトナム軍強化の包括計画とともに、撤退計画もまた完全に存在を停止していた。<sup>(107)</sup>

ジョンソンはその回顧録でNSAM 273を「大統領として私が下した最初の重大な決定」だとし、何よりも「すでに行ってきた政策と行動を堅持する決意を明示した」点を強調している。マクナマラ国防長官も、「ジョンソンの政策はケネディのそれと変わらなかった」という。<sup>(108)</sup> だが、ジョンソンがNSAM 273によってケネディの段階的撤退計画を逆転させ、アメリカをエスカレーションの道に導いた——そのためにこそケネディは暗殺されたのだ——とする者との論争も続いている。<sup>(109)</sup> たしかにジョンソンはかねて「現実面でも政治的観点からも、撤退は災厄となろう」と断言していた人物である。ジョンソン政権の初期、「われわれは撤退を一度も真剣に考えたことはなかった」とラスク国務長官もいう。だがそれはむしろ「北ベトナムによる浸透継続と、SEATO〔東南アジア条約機構〕へのコミットメント」のゆえだった。<sup>(110)</sup>

ジェム政権崩壊、ケネディ暗殺と同様にして、ベトナム情勢はアメリカの予想を超えて悪化していった。だが「われわれはベトナムに、勝利のため必要な兵力ならどれほどでも維持する」というのが、ケネディの死から五日後、ヒルズマンがチャン・カン・タンに向かって断言した言葉である。ジョンソン政権になっても、「北ベトナムの共産主義政権がベトナム共和国を破壊する作戦を止めれば」アメリカがベトナムに存在する理由もなくなる、という基本的な姿勢はまったく変わらなかった。ケネディ政権であろうとジョンソン政権であろうと、アメリカにとって勝利なき撤退などまさに論外だったのである。<sup>(111)</sup>

## おわりに

たいまつは引き継がれた

一九六〇年代末、ニクソン（Richard M. Nixon）大統領は「名誉ある撤退」実現をめざして「ベトナム化」政策を打ち出した。だがそのはるか以前、ケネディが求めたのも同じ、戦争のベトナム化だった。<sup>(註)</sup> シュレジンガーは、一九五一年に若き下院議員としてインドシを訪れた経験を持つケネディが「わが国の介入がベトナムの民族主義を敵にまわし、アジアの内戦を白人の戦争に変えてしまう」危険にことのほか敏感であり、「アメリカが南ベトナム人の代わりに戦争に勝つことはできない」とも語っていた」と回顧する。上院議員時代の一九五四年、ケネディはアイゼンハワー政権によるインドシナ軍事介入の試みに対して「少なくともかすかな勝利の見込みすらないまま、インドシナのジャングルに資金、物資、人員を注ぎ込んでも、危険なまでに不毛な、かつ自己破壊的な結果になるだろう」と警鐘を鳴らしていた。<sup>(註)</sup>

しかしその九年後の秋、実際にはケネディは戦争を事実上アメリカ化させていた。一九六三年三月、ボウルズ（Chester Bowles）無任所大使（前国務次官、のち駐インド大使）はケネディに、共産側が行動を限定し、その結果アメリカが「現在の『顧問的』作戦」を続けるだけで済むと考えるのは「重大な誤りではないか」と問いかけている。事実、「状況をコントロールするかわりに、状況が彼（ケネディ）をコントロールし始めた」とシュレジンガーはいう。それはアメリカにベトナムからの離脱ではなく、いつその介入を迫ったのである。<sup>(註)</sup>

ケネディ政権はラオスで、「これは彼らの戦争だ。彼らが助力を求めてきたのであり、われわれはそれを与えなければならぬ」（ハリマン）という立場を維持していた。ベトナムでも同じだった。ケネディは難渋のすえ、一九六

二年七月にラオス和平に漕ぎつけたが、ベトナムでは「それ以上に最終的な、容易な解決はほど遠かった」（ソレンセン）のである。その結果、ケネディが就任演説でいった言葉——「たいまつは新しい世代のアメリカ人に引き継がれた」——は、皮肉なことにベトナムで現実となった。ベトナム人はそれまで少なくとも建前としては演じていた戦争遂行の主役を、アメリカ人にはつきりと明け渡そうとしていた。<sup>(15)</sup>

### 臆病者の横顔

のち『ペンタゴン・ペーパーズ』は、一九六三年についてこう分析している。「後から考えれば、これがわが国のベトナム介入史の中で、根本的な選択を行った時期の一つだったことは明らかである。この時点で名譽を保ちながら撤退するという選択肢は、現在では魅力的なほど低コストなもののように思える。しかしケネディ政権にとって当時、そのコストははるかに高く見えたのである」。ビッセル(Richard Bissell)元CIA副長官のように、そもそもケネディがベトナム問題に初めて直面した一九六一年の段階で「いまから考えれば損失を断ち切り完全に引き揚げたほうがたぶんよかつただろう。だがそれは望ましい行動だとは思えなかつたのだ」と語る者もいる。<sup>(16)</sup>

ケネディが側近などに「一九六五年にベトナムから出て行く計画だという印象を与えた」としても、そう「決断していたということにはならない」と、ラスク國務長官はいう。一九五四年、アイゼンハワー政権は第一次インドシナ戦争におけるディエンビエンフーの敗北、ジュネーブ協定による北部ベトナムの喪失をフランスの責めに帰すことができた。しかし「今日、私は一九五四年の敗北を受け入れることはできない」とケネディは語っている。<sup>(17)</sup>

一九六三年九月、ハリマンは「いずれにしても、ベトコンがベトナム政府への攻撃を止めればすぐに、われわれは出て行く」と述べている。<sup>(18)</sup>裏を返せば、あくまで南ベトナムの独立を支援するというアメリカの政策が不変である



限り、また南ベトナム情勢の大幅な好転がないうちは、撤退など考えられなかった。

ケネディの三選は憲法上ありえず、したがって一九六五年以降ならなんでもできたはずだという議論は、彼が弟のロバート、そしてエドワードの政治的将来——ケネディ王朝の確立——に抱いていた責任を看過している。ケネディが弟たちが大統領となる可能性を犠牲にしてまで不人気な撤退を断行できるほど政治的勇氣にあふれた人物だったとすれば、一九六三年の行動はなんともお粗末だった。それはむしろ、上院議員時代に政治的勇氣をテーマに『勇者の横顔 (Profiles in Courage)』を著し、ピューリッツァー賞を受けた人物が、はからずも「臆病者の横顔 (A Profile in Cowardice)」をやらけ出した年と見るべきだろう。

### 一九六五年の呪縛

段階的撤退計画がいよいよ現実化しようとしていた一九六三年春、すでに「逆流」が存在していたと『ペンタゴン・ペーパーズ』は分析している。だからこそケネディの賛美者、たとえばシュレジンガーは、ケネディが「一九六五年末までにアメリカ人顧問を引き揚げるといふ公式の計画」を残したことを強調するのである。<sup>(18)</sup>

マクナマラがいうように、「一九六三年までに大統領はすでに、どのようによればアメリカは出て行けるかという問題への解答について考えをめぐらせていた」のは事実だろう。だが千人撤退計画は、アメリカの世論とジェム政権に向けた一種のパフォーマンスという側面があったし、それ以上にたいして根拠のない樂觀にもとづく蜚語楼のようなものだった。この年秋、国務省のサリバン (William Sullivan) が、そもそも一九六五年末までの米軍撤退など「まったく非現実的」であり「まやかし」にすぎないと主張したとき、それを大統領に勧告する役まわりだったマクナマラもテイラーも同意したという。<sup>(19)</sup>

少なくともマクナマラは「あらゆる議論の中で、われわれは依然として撤退についての賛否両論を分析できなかった」と回顧している<sup>(註)</sup>。それは十分に練られ、ベトナムの現実に立脚した計画ではなかった。サイゴンの混沌たる政治状況、ベトナム軍改善の停滞、戦況の悪化など、計画そのものを覆しかねない条件も残されたままだった。

カナダのピアソン (Lester Pearson) 首相が訪米、アメリカはベトナムから手を引くべきだと述べたことがある。このときケネディはこう答えた。「それは拙劣なお答ですね。だれだってそのことは知っていますよ。問題は、どうやって手を引くのか、ということです」。このエピソードを紹介するソレンセンは、「この問題に彼は一九六三―六四年の冬の間、もっと多くの時間をかけ、その結果、解答を見つけ出したであろうと、私は信ずるのだ」と断定している<sup>(註)</sup>。

だが本稿で見たように、こうした確信に明確な根拠が存在するとは必ずしもいいきれない。にもかかわらず、「ケネディが生きていたら」という夢想——ないし信仰——はいまでも続いている。そこにはアメリカが豊かで強力だった時代への郷愁もある。だがそれ以上に、介入の拡大にせよ限定にせよ、あるいは完全な解消にせよ、アメリカの主体的な意志さえあればなにことも可能はずだという、超大国の傲慢な幻想がある。だがケネディの介入限定政策も、一九六五年までと期限を定めた完全撤退計画も、その第一段階として実施した千人の引き揚げも、ベトナムという戦場の現実の前にもろくも崩れ去っていったのである。

注

(1) 『NAM——狂気の戦争の真実』同朋舎、一九九〇年、一頁。

(2) Robert S. McNamara (with Brian VanDeMark), *In Retrospect: The Tragedy and Lessons of Vietnam*, New York: Times Books, 1995, pp. 33-4. William P. Bundy, "The Path to Viet Nam: Ten Decisions," *Orbis*, vol. 11, no. 3 (Fall 1967), pp. 647-63.

Paul M. Kattenburg, *The Vietnam Trauma in American Foreign Policy*, New Brunswick, N.J.: Transaction Books, 1980, pp.107-53.

- (3) ケネディによる介入の拡大については、拙著『一九六一 ケネディの戦争——冷戦・ベトナム・東南アジア』朝日新聞社、一九九九年、一五七頁、および拙稿「反乱鎮圧戦略の挫折——ケネディとベトナム戦争・一九六三年」『筑波法政』三八号（二〇〇五年三月）、一七八頁を参照。

- (4) Arthur M. Schlesinger, Jr., *A Thousand Days: John F. Kennedy in the White House*, Boston: Houghton Mifflin, 1965, p.536. Roger Hilsman, *To Move a Nation: The Politics of Foreign Policy in the Administration of John F. Kennedy*, New York: Dell Publishing, 1967 [orig. New York: Doubleday, 1964], p.413. W.W. Rostow, *The Diffusion of Power: An Essay in Recent History*, New York: Macmillan, 1972, p.300.

- (5) James N. Giglio & Stephen G. Rabe, *Debating the Kennedy Presidency*, Lanham, Md.: Rowman & Littlefield Publishers, 2003, pp.4,96,194-5.

- (6) Thomas Brown, *JFK: History of an Image*, London: IB. Tauris, 1988, p.2. 井上一馬『ケネディ——その実像を求めて』講談社現代新書、一九九四年、一四頁。布施泰和『ジョン・F・ケネディ暗殺の動機——今明らかになる神話と謎』近代文芸社、二〇〇〇年、一二〇—一頁。

- (7) ベトナム撤退をケネディ暗殺の動機とする典型的なものを以下を参照。John Newman, *JFK and Vietnam: Deception, Intrigue, and the Struggle for Power*, New York: Warner Books, 1992. Fletcher L. Prouy, *JFK: The CIA, Vietnam, and the Plot to Assassinate John F. Kennedy*, New York: Citadel Press, 1992. Peter Dale Scott, *Deep Politics and the Death of JFK*, Berkeley: Univ. of California Press, 1993. シム・キャリンソン（岩瀬孝雄訳）『JFK——ケネディ暗殺犯を追え』早川書房、一九九二年。マーク・レーン（飯塚忠雄訳）『大がかりな嘘——だれがケネディを殺ったのか』扶桑社、一九九二年。オリヴァー・ストーン＆ザカリー・スクラー（中俣真知子・袴塚紀子訳）『JFK——ケネディ暗殺

の真相を追って』キネマ旬報社、一九九三年。瀬戸川宗太『「JFK」悪夢の真実——ベトナム戦争とケネディ暗殺のシネマ学』社会思想社、一九九五年。仲晃『ケネディはなぜ暗殺されたか』日本放送出版協会、一九九五年。土田宏『秘密工作 ケネディ暗殺——天国からのメッセージ』彩流社、二〇〇三年。

- (8) この論争については、平田雅己『ケネディ・ベトナム撤退論の検証』『国際関係学部研究年報』（日本大学）第一九集（一九九八年二月）、「および拙著（前掲）」、一八二〇頁を参照。

- (9) Garry R. Hess, "Commitment in the Age of Counterinsurgency," David L. Anderson, ed., *Shadow on the White House: Presidents and the Vietnam War, 1945-1975*, Lawrence: Univ. Press of Kansas, 1993, p.67.

- (10) Transcript of Broadcast with Walter Cronkite, Sept.2, 1963, *Public Papers of the Presidents of the United States, John F. Kennedy, 1963* [以下 *PPP*、1963 年録記], Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office [以下 *USGPO* 年録記], 1964, p.652. Rusk's Address, "The Stake in Vietnam," April 22, 1963, U.S. Dept of State, *Department of State Bulletin* [以下 *DSB* 年録記], May 13, 1963, p.730. McNamara's Interview with CBS Report, Sept.25, 1963, Cable, Dept. of Defense [以下 *DSB* 年録記] Public Affairs Office to Dept. of Army [以下 *DOA* 年録記] REUPDA 02A, Sept.26, 1963, National Security Files, Countries File [以下 *NSF-C* 年録記], Box 200, Folder "Vietnam: 9/22/63-10/5/63, Defense Cables," John F. Kennedy Library, Boston [以下 *JFKL* 年録記] (*Vietnam: National Security Files, 1961-1963*, Bethesda, Md.: University Press of America, 1991 [以下 *VNSF* 年録記], Microfilm Reel 5:Frame 722-3). McNamara, *op.cit.*, p.79.

- (11) Hilsman, *op.cit.*, pp.512,533. Memorandum by Phillips, Sept.17, 1963, U.S. Dept. of State, *Foreign Relations of the United States, 1961-1963* [以下 *FRUS* 年録記], vol.4 (Vietnam August-December 1963), USGPO, 1991, p.251.

- (12) Noting in Michael Charlton & Anthony Moncrieff, *Many Reasons Why: The American Involvement in Vietnam*, New York: Hill & Wang, 1978, pp.71,76. Memorandum of Conversation at Gia Long Palace, Saigon, Sept. 29, 1963, *FRUS*, 4, p.317. Telegram, U.S. Embassy in Saigon [以下 *Saigon* 年録記] to Dept. of State [以下 *DOS* 年録記] 916, Nov. 4, 1963, NSF

- C, 201, "Vietnam, 11/3/63-11/5/63, State Cables," JFKL (VNSF, 6:331).
- (13) Dean Rusk (ed. by Daniel S. Papp), *As I Saw It: As Told to Richard Rusk*, New York: W.W. Norton, 1990, p.435. Airgram, DOS to Saigon CA-10362, March 22, 1963, *FRUS*, vol.3 (Vietnam January-August 1963), USGPO, 1991, p.175.
- (14) John Mecklin, *Mission in Torment: An Intimate Account of the U.S. Role in Vietnam*, Garden City, N.Y.: Doubleday, 1965, p.311. Johnson in John F. Kennedy Oral History [訳註 OH 文庫版], JFKL. Rusk, *op.cit.*, p.435.
- (15) Taylor in OH, JFKL. Rostow, *op.cit.*, pp.289-90. Letter, Hilsman to Bundy, May 1, 1963, *FRUS*, 3, p.260.
- (16) ハズルト・J・ノンハンヤン (山田浩二訳)『ハズルトの遺稿』サートル出版会、一九七〇年、一八一頁。Bruce Palmer, Jr., *The 25-Year War: America's Military Role in Vietnam*, Lexington: Univ. Press of Kentucky, 1984, pp.24-5.
- (17) Arthur M. Schlesinger, Jr., *Robert Kennedy and His Times*, New York: Ballantine Books, 1979 (orig. Boston: Houghton Mifflin, 1978), p.764. Gilpatric in OH, JFKL. Kenneth P. O'Donnell & David F. Powers (with Joe McCarthy), "*Johnny, We Hardly Knew Ye: Memories of John Fitzgerald Kennedy*," New York: Pocket Books, 1973 (orig. Boston: Little Brown, 1972), p.444.
- (18) ノンハンヤン、前掲、一八〇頁。Hilsman, *op.cit.*, p.536. Roger Hilsman, "McNamara's War," *Foreign Affairs*, vol.74, no.4 (July/Aug. 1995), p.165.
- (19) Colby in Charlton & Monciuff, *op.cit.*, p.429. Robert S. McNamara, et al., *Argument Without End: In Search of Answers to the Vietnam Tragedy*, New York: Public Affairs, 1999, p.396. ノンハンヤン、前掲、一七八頁。アメリカ研究所編訳『世紀の大論戦——アメリカ上院外交委員会ベトナム問題公聴会議事録』三一書房、一九六六年、三四六頁。ケネディが戦闘部隊の派遣に反対し介入を極力限定しようとしたことを強調する見方としては以下を参照。George McT. Kahin & John W. Lewis, *The United States and Vietnam*, New York: Dial Press, 1967, p.146. Weldon A. Brown, *Prelude to Disaster: The American Role in Vietnam 1940-1963*, Port Washington, N.Y.: Kennikat Press, 1975, p.184. Weldon A. Brown,

- The Last Chopper: The Denouement of the American Role in Vietnam, 1963-1975*, Kennikat Press, 1976, p.4. William J. Duker, *Vietnam: Nation in Revolution*, Boulder, Colo.: Westview Press, 1983, p.56. William J. Rust, *Kennedy in Vietnam*, New York: Charles Scribner's Sons, 1985, pp.xi,71. Brian VanDeMark, "A Way of Thinking: The Kennedy Administration's Initial Assumptions about Vietnam and Their Consequences," Lloyd C. Gardner & Ted Gittinger, eds., *Vietnam: The Early Decisions*, Austin: Univ. of Texas Press, 1997, pp.33-4. Anthony O. Edmonds, *The War in Vietnam*, Westport, Conn.: Greenwood Press, 1998, p.15. Fredrik Logevall, *Choosing War: The Lost Chance for Peace and the Escalation of War in Vietnam*, Berkeley: Univ. of California Press, 1999, p.23. 井上「前掲」一四九一五〇「一五七頁」。
- (20) Telegram, DOS to All ARA Diplomatic Posts Circular 841, Nov.4, 1963, NSF-C, "Vietnam, 11/3/63-11/5/63, State Cables," JFKL (VNSF, 6.358).
- (21) Rusk in OH, JFKL. Ball in Charlton & Moncrieff, *op.cit.*, p.78. シムンギン「前掲」一七八頁。Memorandum, Wood to Hilsman, April 18, 1963, *FRUS*, 3, p.245.
- (22) Chester L. Cooper, *The Lost Crusade: America in Vietnam*, New York: Dodd, Mead, 1970, p.201. Schlesinger, *op.cit.* (1965), p.549.
- (23) George S. Eckhardt, *Command and Control: 1950-1969*, Washington, D.C.: Dept. of Army, 1974, p.42. Sanford Wexler, *The Vietnam War: An Eyewitness History*, New York: Facts on File, 1992, pp.71-2.
- (24) Gilparic in OH, JFKL. Robert W. Komer, *Bureaucracy at War: U.S. Performance in the Vietnam Conflict*, Boulder, Colo.: Westview Press, 1986, p.123. Katzenburg, *op.cit.*, p.112.
- (25) Mecklin, *op.cit.*, pp.21-2.
- (26) Hilsman in Charlton & Moncrieff, *op.cit.*, p.84. Prouty, *op.cit.*, p.114.
- (27) Memorandum, Theodore J. C. Heavner to Hilsman, May 15, 1963, *FRUS*, 3, p.304. W. Brown, *op.cit.* (1975), p.182.

- (28) Morse in William Conrad Gibbons, *The U.S. Government and the Vietnam War: Executive and Legislative Roles and Relationships*, Pt. II (1961-1964), Princeton, N.J.: Princeton Univ. Press, 1986, p.110. Memorandum, Rostow to Rusk, July 4, 1963, *FRUS*, 3, p.455. McNamara, *op.cit.*, p.321.
- (29) Mecklin, *op.cit.*, p.122. McNamara, *op.cit.*, p.333.
- (30) Hilsman in *FRUS*, 3, p.63m. Rusk in OH, JFKL. Kattenburg, *op.cit.*, p.116. 強調は原文。とくにケネディによる介入の拡大と戦争のアメリカ化を指摘するものについては以下を参照。David Halberstam, *The Best and the Brightest*, New York: Random House, 1969, pp.200,300-1. Moya Ann Ball, *Vietnam-on-the-Potomac*, New York: Praeger, 1992, p.2. David F. Schmitz, *Thank God They're on Our Side: The United States and Right-Wing Dictatorships, 1921-1965*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1999, p.252. Lawrence Freedman, *Kennedy's Wars: Berlin, Cuba, Laos, and Vietnam*, New York: Oxford Univ. Press, 2000, p.416. David L. Anderson, *The Vietnam War*, New York: Palgrave Macmillan, 2005, p.40. Rust, *op.cit.*, p.90. Giglio & Rabe, *op.cit.*, pp.56,60-1. Logevall, *op.cit.*, p.69. 丸山泉「ケネディ政権のベトナム政策」『政治研究』(九州大学法学部政治研究室) 二九号(一九八二年)「六〇頁。
- (31) ケネディの不決断、現状維持策、場当たりの対応などを指摘するものとしては以下を参照。Leslie H. Gelb & Richard K. Betts, *The Irony of Vietnam: The System Worked*, Washington, D.C.: Brookings Institution, 1979, p.98. Michael Maclear, *The Ten Thousand Day War: Vietnam, 1945-1975*, New York: Avon Books, 1981, p.81. George Donelson Moss, *Vietnam: An American Ordeal*, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1990, p.109 et passim. Douglas A. Borer, *Superpowers Defeated: Vietnam and Afghanistan Compared*, London: Frank Cass, 1999, pp.105,108. Noam Chomsky, *Rethinking Camelot: JFK, the Vietnam War, and U.S. Political Culture*, Montreal: Black Rose Books, 1993, p.105. Halberstam, *op.cit.*, p.286. Edmonds, *op.cit.*, p.15. Rust, *op.cit.*, p.x. Freedman, *op.cit.*, p.402. 井上「前掲」一四九頁。
- (32) ビーター・コリヤー & デヴィッド・ホロウィッツ(鈴木主税訳)『ケネディ家の人びと』草思社、一九九〇年、下

一一五頁。

- (33) George W. Ball, *The Past Has Another Pattern: Memoirs*, New York: W.W. Norton, 1982, p.369. Henry Cabot Lodge, *The Storm Has Many Eyes: A Personal Narrative*, New York: W.W. Norton, 1973, p.205. McNamara, *op.cit.*, p.41. Mecklin, *op.cit.*, p.21.
- (34) Ball in Charlton & Moncrieff, *op.cit.*, pp.77-8. Kattenburg, *op.cit.*, p.209. Schlesinger, *op.cit.* (1979), p.767. エズリル・ハンリマン (吉沢清次郎訳) 『米ソ——変わりゆく世界』時事通信社、一九七一年、一六五頁。
- (35) ビュエル・サリンジャー (小谷秀二郎訳) 『ケネディと共に』鹿島研究所出版会、一九六六年、二〇七頁。Airgram, DOS to Saigon CA-10362, March 22, 1963, *FRUS*, 3, p.177. Rusk's Address, "The Stake in Vietnam," April 22, 1963, *DSB*, May 13, 1963, p.730. McNamara's Interview with CBS Report, Sept.25, 1963, Cable, DOD Public Affairs Office to DOA REUPDA 02A, Sept.26, 1963, NSF-C, 200, "Vietnam: 9/22/63-10/5/63, Defense Cables," JFKL (*VNSF*, 5:722).
- (36) Report from Manning to President, n.d., *FRUS*, 3, p.531.
- (37) Mecklin, *op.cit.*, p.63. ニール・シーハン (菊谷匡祐訳) 『輝ける嘘』集英社、一九九二年、上、七五頁。
- (38) ビーター・アーネット (沼澤治治訳) 『戦争特派員——CNN名物記者の自伝』新潮社、一九九五年、七八頁。
- (39) Daniel C. Hallin, *The "Uncensored War": The Media and Vietnam*, Berkeley: Univ. of California Press, 1989 (orig. New York: Oxford Univ. Press, 1986), p.40. シーハン、前掲、上、一五二、三三八頁。朝日新聞調査研究室『激動するインドシナ』朝日新聞社、一九六三年、五頁。
- (40) シーハン、前掲、上、八九—九〇頁。Mecklin, *op.cit.*, p.116.
- (41) フィリップ・ナイトリー (芳地昌三訳) 『戦争報道の内幕——隠された真実』時事通信社、一九八七年、三三六頁。
- (42) Telegram, DOS to Saigon 688, Jan.13, 1963, NSF-C, 197, "Vietnam, vol.X, 1/10/63-1/30/63," JFKL (*VNSF*, 4:217). Airgram, Saigon to DOS A-661, April 25, 1963, *FRUS*, 3, p.250.



- (43) O'Donnell & Powers, *op.cit.*, p.17. ノンセン'前掲'一七八頁。Frederick Nolting, *From Trust to Tragedy: The Political Memoirs of Frederick Nolting, Kennedy's Ambassador to Diem's Vietnam*. New York: Praeger, 1988, p.91.
- (44) Telegram, DOS to Saigon 828, Feb.27, 1963, *FLHRS*, 3, p.128.
- (45) Wexler, *op.cit.*, p.75.
- (46) Transcript of Broadcast with Cronkie, Sept.2, 1963, *PPP*, 1963, p.652. 上記では繰り返しが無いが、『ケネディ——JFK 一九一七—一九六三』クロニクル社'一九八三年'一二八頁および録音テープでは二度繰り返している。
- (47) President's News Conferences, March 6 & July 17, *PPP*, 1963, pp.243,569.
- (48) Schlesinger, *op.cit.* (1979), p.772.
- (49) Francis X. Winters, *The Year of the Hare: America in Vietnam, January 25, 1963-February 15, 1964*, Athens: Univ. of Georgia Press, 1997, p.192. Schlesinger, *op.cit.* (1979), p.779.
- (50) Halberstam, *op.cit.*, p.209. Winters, *op.cit.*, p.138.
- (51) Freedman, *op.cit.*, p.363. Prouty, *op.cit.*, p.xxxii.
- (52) O'Donnell & Powers, *op.cit.*, p.480. Schlesinger, *op.cit.* (1979), pp.768,772.
- (53) Winters, *op.cit.*, p.192.
- (54) O'Donnell & Powers, *op.cit.*, p.444. Schlesinger, *op.cit.* (1979), p.779. Halberstam, *op.cit.*, p.300. Larry Berman, "NSAM 263 and NSAM 273: Manipulating History," Gardner & Gittinger, *op.cit.*, p.184. ノンセン'前掲'一八六頁。ジョン・ケネス・ガルブレイス (橋本恵訳) 『二〇世紀を創った人々——ガルブレイス回顧録』ティービーエス・ブリタニカ、一九九九年、一五一頁。
- (55) Schlesinger, *op.cit.* (1979), p.774.
- (56) O'Donnell & Powers, *op.cit.*, p.16. 強調は原文。

- (57) Winters, *op.cit.*, p.192. O'Donnell & Powers, *op.cit.*, pp.12-3.
- (58) Halberstam, *op.cit.*, p.296. Freedman, *op.cit.*, p.xi.
- (59) Terry Dietz, *Republicans and Vietnam, 1961-1968*, New York: Greenwood Press, 1986, p.44.
- (60) Gelb & Betts, *op.cit.*, p.212.
- (61) Winters, *op.cit.*, p.65.
- (62) Hallin, *op.cit.*, pp.29,61-2. Halberstam, *op.cit.*, p.286. Schlesinger, *op.cit.* (1979), p.766.
- (63) Wilbur H. Morrison, *The Elephant and the Tiger: The Full Story of the Vietnam War*, New York: Hippocrene Books, 1990, p.114. Chomsky, *op.cit.*, p.117. Logevall, *op.cit.* (1999), p.69. Fredrik Logevall, *The Origins of the Vietnam War*, Harlow, U.K.: Pearson Education, 2001, p.54. 平田『前掲』一四七頁。
- (64) T. Brown, *op.cit.*, p.26.
- (65) Rusk, *op.cit.*, pp.434,441.
- (66) Chomsky, *op.cit.*, p.105 et passim. 平田『前掲』一四二、一五一頁。
- (67) Mansfield in Charlton & Moncrieff, *op.cit.*, p.81. マイク・マンズフィールド (小孫茂編著) 『マンズフィールド 二〇世紀の証言』日本経済新聞社、一九九九年、四七頁。
- (68) Chomsky, *op.cit.*, p.116. T. Brown, *op.cit.*, p.40. ジョン・ケネス・ガルブレイス (西野照太郎訳) 『大使の日記——ケネディ時代に関する私的記録』河出書房新社、一九七三年、五七五頁。
- (69) 堀田宗路『ジョン・F・ケネディの謎——権力の陰謀とアメリカの悪夢』日本文芸社、一九九二年、六五頁。Dietz, *op.cit.*, p.55. Logevall, *op.cit.* (1999), p.73.
- (70) Schlesinger, *op.cit.* (1979), pp.765-6.
- (71) President's News Conference, Sept.12, 1963, *PPP, 1963*, p. 673. Memorandum of Conversation, Hilsman & Bundy, Aug. 31,

- 1963, *FRUS*, 4, p.75. Telegram, DOS to Saigon 294, Aug.31,1963, *ibid.*, 4, p.76.
- (72) Sorensen in OH, JFKL. R. Kennedy in William Conrad Gibbons, "Lyndon Johnson and the Legacy of Vietnam," Gardner & Gillingter, *op.cit.*, p.132. W. Bundy in Gibbons, *op.cit.* (1986), p.205. Katzenburg, *op.cit.*, p.120.
- (73) Memorandum of Conversation at DOS, Aug.31, 1963, *FRUS*, 4, p.73.
- (74) U.S. Dept. of Defense, *United States-Vietnam Relations 1945-1967: Study Prepared By the Department of Defense* [式レ USVR ヲ鑑註], Book 3, Section IV.B.5, p.25. *The Pentagon Papers: The Defense Department History of United States Decisionmaking on Vietnam* (Senator Gravel Edition), Boston: Beacon Press, 1971. [式レ PP ヲ鑑註], vol.2, p.243. Memorandum of Conference, Sept.6, 1963, *FRUS*, 4, p.118. McNamara, *op.cit.*, p.63.
- (75) Schlesinger, *op.cit.*, pp.769-70.
- (76) Memorandum of Conversation at DOS, Aug.31, 1963, *FRUS*, 4, p.74.
- (77) Memorandum of Conference, Sept.6, 1963, *ibid.*, 4, p.120. McNamara, *op.cit.*, p.63.
- (78) Rusk, *op.cit.*, p.492. Katzenburg, *op.cit.*, p.120. Letter, Harriman to Lodge, Sept.14, 1963, *FRUS*, 4, p.209.
- (79) Draft Telegram, DOS to Saigon, Sept.12, 1963, *ibid.*, 4, p.197. Draft Telegram, DOS to Saigon, n.d., attached to Memorandum, Hilsman to Rusk, Sept.16, 1963, *ibid.*, 4, p.225.
- (80) Freedman, *op.cit.*, p.372. Schlesinger, *op.cit.*, p.770. キービッシュ・ハルバスタム (泉鴻彦・林雄一郎訳) 『ベトナム戦争』みすず書房、一九六八年 (改題『ベトナムの泥沼から』一九八七年) 一三六頁。
- (81) DOS American Opinion Summary, Sept.10, 1963, NSF-C, 200, "Vietnam: 9/18/63-9/21/63, Memos and Miscellaneous], JFKL (*VNSF*, 5:482) Logevall, *op.cit.* (1999), p.42. Stanley Karnow, *Vietnam: A History*, New York: Penguin Books, 1984 (orig. New York: Viking Press, 1983), p.292.
- (82) Schlesinger, *op.cit.* (1979), pp.767,782. Fulbright in Gibbons, *op.cit.* (1986), p.120.

- (53) Gelb & Betts, *op.cit.*, pp.211-2. Tom Wells, "The Anti-Vietnam War Movement in the United States," Peter Lowe, ed., *The Vietnam War*, London: Macmillan, 1998, p.115. H. Bruce Franklin, *Vietnam and Other American Fantasies*, Amherst: Univ. of Massachusetts Press, 2000, p.54.
- (54) Airgram, DOS to Saigon CA-10362, March 22, 1963, *FRUS*, 4, p.175. James Thomas Graham, Jr., *President John F. Kennedy's Information Strategy and Foreign Policy*, Ph.D. Dissertation, Univ. of Connecticut, 1996, p.145.
- (55) Logevall, *op.cit.* (1999), pp.56-8. McGovern in Hess, *op.cit.*, p.79.
- (56) Graham, *op.cit.*, pp.145,148.
- (57) Evelyn Lincoln, *Kennedy and Johnson*, New York: Holt, Rinehart & Winston, 1968, p.200. Logevall, *op.cit.* (1999), p.40.
- (58) Mecklin, *op.cit.*, p.232. Freedman, *op.cit.*, p.415.
- (59) タニエル・エルズバーグ(梶谷善久訳)『ベトナム戦争報告』筑摩書房、一九七三年、八七頁。 Schlesinger, *op.cit.* (1965), pp.721-2. Rusk, *op.cit.*, p.441. Rusk in Charlton & Moncrieff, *op.cit.*, p.82.
- (60) Schlesinger, *op.cit.* (1965), pp.909-10. Joseph Raugh, Jr. in Charlton & Moncrieff, *op.cit.*, p.500.
- (61) シュルツマン、前掲、一八二頁。
- (62) *PP*, 2, p.167. Memorandum for Record of Secretary of Defense Conference at Honolulu, May 6, 1963, *FRUS*, 3, p.270.
- (63) Telegram, JCS to CINCPAC 9820, May 9, 1963, *FRUS*, 4, p.276n. *USVR*, 3, IV:B.4, p.13. *PP*, 2, p.181.
- (64) *PP*, 2, p.168. Memorandum, JCS to McNamara JCSM-629-63, Aug.20, 1963, *FRUS*, 4, p.591.
- (65) White House Statement, Oct.2, 1963, *PPP*, 1963, p.760. David Kaiser, *American Tragedy: Kennedy, Johnson, and the Origins of the Vietnam War*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard Univ. Press, 2000, p.281.
- (66) *USVR*, 3, IV:B.4, p.16. *PP*, 2, p.169.
- (67) National Security Action Memorandum [大統領 NSAM 文書] 263, Oct.11, 1963, *FRUS*, 4, p.396. Prouty, *op.cit.*, p.xix et

passim. Newman, *op.cit.*, p.409. Scott, *op.cit.*, p.26. 小倉貞男『ドキュメント ヴェトナム戦争全史』岩波書店、一九九二年、一一九頁。

- (66) Logevall, *op.cit.* (1999), pp.70-1. Giglio & Rabe, *op.cit.*, p.64. Lloyd C. Gardner in Garder & Gittinger, *op.cit.*, p.4. Gelb & Betts, *op.cit.*, p.93.
- (66) McNamara in Logevall, *op.cit.* (1999), p.98.
- (100) Schlesinger, *op.cit.* (1979), p.765. *USVR*, 3, IV.B.4, p.iii. *PP*, 2, p.162.
- (101) Memorandum, Wood to Hilsman, April 18, 1963, *FRUS*, 3, p.245.
- (102) Noling, *op.cit.*, pp.95-6.
- (103) Memorandum for Record of Secretary of Defense Conference at Honolulu, May 6, 1963, *FRUS*, 3, p.270.
- (104) McNamara, *op.cit.*, pp.79-80. 強調は原文。
- (104) *USVR*, 3, IV.B.4, p.4.
- (105) Cable, CINCPAC to JCS 212210Z, Oct.8, 1963, NSF-C, 200, "Vietnam, 10/6/63-10/16/63, Defense Cables," JFKL (VNSF, 5: 869).
- (107) Memorandum of Conversation at White House, April 4, 1963, *FRUS*, 3, p.200.
- (108) Cable, CINCPAC to JCS 212210Z, Oct.8, 1963, NSF-C, 200, "Vietnam, 10/6/63-10/16/63, Defense Cables," JFKL (VNSF, 5: 867). "CINCPAC's Withdrawal Plan," n.d., *FRUS*, 3, p.592.
- (109) Memorandum, JCS to McNamara JSCM-629-63, Aug.20, 1963, *FRUS*, 3, p.591. "CINCPAC's Withdrawal Plan," n.d., *ibid.*, 3, p.593. Cable, CINCPAC to JCS 212210Z, Oct.8, 1963, NSF-C, 200, "Vietnam, 10/6/63-10/16/63, Defense Cables," JFKL (VNSF, 5:870).
- (111) *USVR*, 3, IV.B.4, pp.15-6. *PP*, 2, p.182. Kaiser, *op.cit.*, p.281.

- (11) *USVR*, 3, IV.B.4, p.23. *PP*, 2, p.188. Maxwell D. Taylor, *Swords and Plowshares*, New York: W.W. Norton, 1972, p.299.
- (12) Telegram, JCS to COMUSMACV & CINCPAC JCS 2792, Oct.5, 1963, NSF-C, 200, "Vietnam: 9/22/63-10/5/63, Defense Cables," JFKL (VNSF, 5:732).
- (13) Taylor, *op.cit.*, pp.296-7,299. Telegram, DOS to Saigon 874, Nov.27, 1963, *FRUS*, 4, p.641.
- (14) Komer, *op.cit.*, p.32. Memorandum of Meeting, Nov.24, 1963, *FRUS*, 4, p.635.
- (15) Memorandum for Record of Secretary of Defense Conference at Honolulu, May 6, 1963, *FRUS*, 3, p.270. Telegram, DOS to Saigon 1084, May 13, 1963, *ibid.*, 3, p.295. Cable, CINCPAC to JCS 212210Z, Oct.8, 1963, NSF-C, 200, "Vietnam, 10/6/63-10/16/63, Defense Cables," JFKL (VNSF, 5:866). President's News Conference, Oct.31, 1963, *PPP*, 1963, p.828. Taylor, *op.cit.*, p.299.
- (16) Memorandum, Wood to Hilsman, April 18, 1963, *FRUS*, 3, p.244. Telegram, DOS to Saigon 61, Nov.13, 1963, NSF-C, 202, "Vietnam, 11/6-15/63, State Cables," JFKL (VNSF, 6:521)
- (17) Draft Statement, Oct.2, 1963, NSF-C, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc," JFKL (VNSF, 5:617). White House Statement, Oct.2, 1963, *PPP*, 1963, pp.759-60.
- (18) Taylor, *op.cit.*, p.298. Cooper, *op.cit.*, p.216.
- (19) *USVR*, 3, IV.B.4, p.i. *PP*, 2, p.160.
- (20) *USVR*, 3, IV.B.4, p.iv. *PP*, 2, p.162. McNamara, *op.cit.*, pp.48-9. Record of 6th Secretary of Defense Conference, July 23, 1962. *FRUS*, vol.2 (Vietnam 1962), USGPO, 1990, p.548.
- (21) Memorandum, Wood to Hilsman, April 18, 1963, *FRUS*, 3, p.84. "JCS Team Report on South Vietnam," n.d. [Jan.], *ibid.*, 3, p.243.
- (22) 丸山『前掲』四五頁。

- (121) Taylor, *op.cit.*, p.288. Memorandum for Record of Secretary of Defense Conference at Honolulu, May 6, 1963, *FRUS*, 3, p.268. Telegram, JCS to CINCPAC 9820, May 9, 1963, *ibid.*, 4, p.276n.
- (122) *USVR*, 3, IV.B.4, p.39. *PP*, 2, p.200.
- (123) "Comprehensive Plan for South Vietnam," n.d., enclosed with Memorandum, Felt to JCS CINCPAC 3010 Ser 0079, Jan.25, 1963, *FRUS*, 3, p.44. Memorandum, [Forrestal] to Bundy, n.d., NSF-C, 202, "Vietnam, 6-15 November 1963, Memos & Misc.," JFKL (VNSF, 6:411).
- (124) White House Statement, Oct.2, 1963, *PPP*, 1963, p.760. Memorandum, McNamara & Taylor to President, Oct.2, 1963, NSF-C, 200, "Vietnam, vol.XVIII, 9/22/63-10/14/63, McNamara-Taylor Report," JFKL (VNSF, 5:751).
- (125) Telegram, DOS to Saigon 874, Nov.27, 1963, *FRUS*, 4, p.640.
- (126) Report by Krulak, "Visit to Vietnam 25 June-1 July 1963," n.d., *FRUS*, 3, p.465.
- (127) Lyndon Baines Johnson, *The Vantage Point: Perspectives of the Presidency 1963-1969*, New York: Holt, Rinehart & Winston, 1971, pp.44,46.
- (128) Harkins' Announcement, Dec.2, 1963, *FRUS*, 4, p.652. *USVR*, 3, IV.B.4, pp.32-3. *PP*, 2, p.194.
- (129) McNamara, *op.cit.*, pp.29,80. Cooper, *op.cit.*, p.216.
- (130) Report by Krulak, "Visit to Vietnam 25 June-1 July 1963," n.d., *FRUS*, 3, p.464. McNamara, *op.cit.*, p.49.
- (131) Memorandum, McNamara & Taylor to President, Oct.2, 1963, NSF-C, 200, "Vietnam, vol.XVIII, 9/22/63-10/14/63, McNamara-Taylor Report," JFKL (VNSF, 5:751). News Conference at White House, Oct.2, 1963, NSF-C, 200, "Vietnam, 9/22/63-10/5/63, Memos and Misc.," JFKL (VNSF, 5:609-10).
- (132) O'Donnell & Powers, *op.cit.*, p.17.
- (133) NSAM 273, Nov.26, 1963, *FRUS*, 4, p.638.

- (136) *USVR*, 3, IV.B.4, p.30. *PP*, 2, p.191. Berman, Gardner & Gittinger, *op.cit.*, p.187. Peter Dale Scott, "Vietnamization and the Drama of the Pentagon Papers," *PP*, 5, 1972, pp.227-8. Newman, *op.cit.*, pp.432-3.
- (137) O'Donnell & Powers, *op.cit.*, pp.18,443. *USVR*, 3, IV.B.4, p.37. *PP*, 2, pp.197-8.
- (138) Johnson, *op.cit.*, p.45. McNamara, *op.cit.*, p.102. *NのV M 263とNのV M 273の連続性を強調するものとして注を参照*。  
*PP*, 3, pp.2,17-9. Anthony Short, *The Origins of the Vietnam War*, London: Longman, 1989, p.279. McNamara, et al., *op.cit.*, p.166. Schlesinger, *op.cit.* (1979), pp.782-3. Chomsky, *op.cit.*, pp.84-6,127. Anderson, *op.cit.* (2005), p.40. Gelb & Betts, *op.cit.*, p.97. Wexler, *op.cit.*, p.60. 平田 前掲 一四八-一九頁。
- (139) *NのV M 263とNのV M 273の間に生じた変化に着目するものとして注を参照*。Newman, *op.cit.*, pp.439,445-9. Prouy, *op.cit.*, p.ix et passim. Scott, *op.cit.* (1972), pp.212-5. Scott, *op.cit.* (1993), pp.26-32. Berman, *op.cit.*, p.179. 小倉 前掲 一一五、一三三頁。仲 前掲 四〇頁。
- (140) Memorandum of Meeting at DOS, Aug.31, 1963, *USVR*, 12, p.543. Rusk, *op.cit.*, p.443.
- (141) Telegram, DOS to Saigon 874, Nov.27, 1963, *FRUS*, 4, p.640. Telegram, DOS to Saigon 931, Dec.12, 1963, *ibid.*, 4, p.706.
- (142) Lloyd C. Gardner in William A. Williams, et al. eds., *America in Vietnam: A Documentary History*, Garden City, N.Y.: Anchor Books, 1985, p.143. Prouy, *op.cit.*, pp.3,14-5.
- (143) Schlesinger, *op.cit.* (1965), pp.997-8. John F. Kennedy (ed. by Allan Nevins), *The Strategy of Peace*, New York: Harper & Brothers, 1960, p.59.
- (144) Memorandum, Bowles to President, March 7, 1963, *FRUS*, 3, p.138. Schlesinger, *op.cit.* (1979), p.767.
- (145) Harriman in Cooper, *op.cit.*, p.193. Theodore C. Sorensen, *Kennedy*, New York: Harper & Row, 1965, p.6-48. Inaugural Address, Jan.20, 1961, *PPP*, 1961, USGPO, 1962, p.1.
- (146) *USVR*, 3, IV.B.5, pp.iv-v. *PP*, 2, p.204. Bissell in Gerald S. Strober & Deborah H. Strober, "Let Us Begin Anew": An



*Oral History of the Kennedy Presidency*, New York: Harper Perennial, 1994 (orig. New York: Harper Collins, 1983), p.404.

- (147) Rusk, *op.cit.*, p.442. Schlesinger, *op.cit.* (1965), p.339.
- (148) Memorandum of Meeting at DOS, Sept.16, 1963, *FRUS*, 4, p.219.
- (149) *USVR*, 3, IV.B.4, p.10. *PP*, 2, p.179, Schlesinger, *op.cit.* (1979), p.781.
- (150) McNamara, et al., *op.cit.*, p.99. 強調は原文。 Gibbons, *op.cit.*, p.186.
- (151) McNamara, *op.cit.*, p.63.
- (152) ソレンセン、前掲、一八〇頁。

〔本論文は文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）「ゴ・ジン・ジェム政権崩壊に見るアメリカと南ベトナム関係としてのベトナム戦争」（平成一五～一八年度）および基盤研究（A）（1）「アメリカの戦争と世界秩序形成に関する総合的研究」（平成一六～一八年度）による成果の一部である〕